

## 32

## 杏雨書屋常設展示「流行り病を乗り越えて」

百瀬 祐, 瓢野由美子

武田科学振興財団杏雨書屋

杏雨書屋では2013年に武田薬品大阪工場内から武田道修町ビルに移転して以降、「医学・薬学にまつわる素材と道具類」というテーマで、半年毎に一部展示替えを行いながら道具類を中心に常設展示を実施してきた。しかし新型コロナウイルスの蔓延が繰り返される状況を踏まえ、2022年度は内容を一新し、「流行り病を乗り越えて」というテーマで、特に江戸時代における疱瘡、麻疹、コレラに焦点を当て1年間の展示会を実施した。本日は展示図録を併用してその内容を紹介する。

**【疱瘡】**六世紀に大陸から渡来したとされ、古代・中世には数十年毎に流行して多くの死者を出し、時には政府要人の病死による歴史転換の遠因ともなった疱瘡は、近世には都市部では毎年、周辺地でも数年毎に流行することで人々は免疫を獲得し、江戸期には小児の病となっていた。ただ致死率の高い病であることには変わりなく、人々は禁忌を守り、疱瘡神を祀り、呪い（まじない）に頼りながら病が過ぎ去るのを待った。従って幕末に西洋から導入された種痘（牛痘）は日本人を疱瘡から救う福音となった。展示会場では疱瘡赤絵、疱瘡絵本、ジェンナー『牛痘の原因及び作用に関する研究』、緒方春朔『種痘必順弁』、楳林宗建『牛痘小考』、桑田立斎『牛痘発蒙』、石塚汶上『護痘錦囊正編』等の医書を医家肖像と共に、また種痘普及用の引札、種痘器具、種痘医免許証、医者間の書簡、疱瘡薬として使用された一角の歯等を展示した。

**【麻疹】**疱瘡と同時期に渡来した麻疹もその強い感染力から度々大流行を引き起こし、特に養生を誤ると死に至ることから江戸時代でも侮り難い病だった。また疱瘡と違って20~30年毎に定期的に流行る麻疹は、庶民ばかりか医者にとっても滅多に遭遇しない厄介な代物だった。一方、流行る時期が予測できることで、養生書やお札、禁忌に関する刷り物、まじない物が事前に売り出され、病気を題材にした錦絵や滑稽本が人気になるなど、病気が商機となる皮肉な様相も呈した。会場では上月専庵『鼈頭附方麻疹精要』、葛飾芦庵『麻疹必用』、浅田宗伯『橘窓書影』等の医書、式亭三馬『麻疹戯言』、十返舎一九『右之通麻疹寿福受取帳』等の戯作、はしか絵、麻疹除けに使われたタラヨウの葉等を展示した。

**【コレラ】**暴瀉病とも呼ばれたコレラは、19世紀前期に外国船の渡来が頻繁になると同時に日本に上陸し、安政5年(1858)の大流行では江戸だけで3万人を超える死者を出した。明治期にも数万人の死者を出す流行が繰り返され、それは衛生環境が改善する大正初期まで続いた。肖像と共に宇田川榕菴『古列亜没爾爺斯説』、緒方洪庵『虎狼痢治準』等の医書、コレラ病神が登場するはしか絵等を展示した。

**【珍獣・怪異への祈り】**江戸時代の人々は怪奇・珍奇なものが厄除けになると信じ、象や駱駝等の体毛や排泄物が薬として売り出され、人魚の骨が疱瘡の薬になるという書物まで出版された。一方アマビエなどの「予言獣」出現の噂が出ると、人々はそれらを話題にすることで病から逃れようとした。会場では予言獣の姫魚や白沢の図、鍾馗版画、人魚図が掲載されたヨンスター『動物図譜』等を展示した。

有史以来、様々な流行り病と闘ってきた日本人。特効薬やワクチンのない時代、人々は神仏に祈り、養生書を読みふけり、禁忌を守り、呪いを信じ、神棚を整え、時には忌避すべき病神を祀ることまでして病が通り過ぎるのを待った。一方で、江戸期の日本人は病を憂えるだけでなく、それを商機とし、風刺画や戯作、滑稽本などで笑い飛ばすなど、様々な手法で流行り病を乗り越えてきた。今回新型コロナウイルス感染症のパンデミックに直面し、私たちは今も感染症と共存していることに改めて気づかされた。今回の展示が数々の疫病を乗り越えてきた人々の生きる力や医家たちの尽力を思い起こす機会となったのであれば幸いである。